

【ポスター発表】

福祉系大学生の障がい者に対する態度について
—情報入手の手段の変化—

○ 金城大学 岡村 綾子 (003446)

キーワード3つ：障がい者・態度・情報入手の手段

1. 研究目的

社会福祉系大学の開学初年度よりボランティア活動と障がい者に対する態度に関して質問紙調査を行ってきた。そして、ボランティア活動や障がい者に対する態度の変化について、障がい者に関する図書の読書、障がい者も関する映画やビデオの視聴の影響に関して検討してきた。先行研究においても障がい者に対する態度について、授業や実習の影響、ふれあい体験の影響、障がい者との交流経験の影響、ボランティア活動の影響などの研究^{1)~4)}がおこなわれてきた。しかし、年代による障がい者に対する態度の違いについての研究は認められず、10年前の学生とその時点の学生とを比較した研究⁵⁾を踏まえ、今回は現在の学生と10年前および20年前の学生を対象として検討することにした。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査協力者 A福祉系大学の2003年度・2013年度・2023年度の2~4年生を調査協力者とした。調査協力者数は、2003年度2年生175人、3年生226人、4年生182人、2013年度2年生148人、3年生149人、4年生149人、2023年度2年生95人、3年生118人、4年生105人であった。有効回答数は、2003年度2年生96人、3年生152人、4年生98人、2013年度2年生112人、3年生100人、4年生114人、2023年度2年生69人、3年生78人、4年生69人であった。

(2) 調査内容 質問紙調査の質問として、ボランティア活動の経験、障がいをもつ人に対する読書経験の有無、障がいをもつ人に関する映画やビデオ等の視聴経験の有無、日常生活における障がいをもつ人に対する態度についてをそれぞれ入学前後において尋ねた。

(3) 調査手順 いずれも年度初めのオリエンテーションの機会を利用して質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規定に基づいて実施した。調査協力者には、研究の趣旨を説明し、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについても説明した後に調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認(第2022-09)を得た。本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 研究結果

入学以前にボランティア活動の経験については、各年度とも学年により多少の差はあるが6~7割の者が経験しており、入学以後のボランティア活動については、2023年度の4

年生は、1・2年生の時にコロナ禍だったこともあり約2割の者しか経験していなかった。障がい者に関する読書経験については、入学以前では2003年度は約8割の者が、2013年度は5割強の者が、2023年度は4割前後の者が経験していた。入学以後では2003年度は5割強～8割の者が、2013年度は4割～7割強の者が、2023年度は3割～5割強の者が経験していた。障がい者に関する映画やビデオ等の視聴経験については、入学以前では2003年度は約8割の者が、2013年度は7割前後の者が、2023年度は約6割の者が経験していた。入学以後では2003年度は6割～9割強の者が、2013年度は5割強～8割強の者が、2023年度は6割強～約8割の者が経験していた。

障がいをもつ人に対する態度については、これまでの報告⁵⁾に倣い、「積極的理解」「消極的理解」「理解無」の3項目に質問の選択肢を分類し、比較検討を行った。障がい者に対する態度については、入学以前では2003年度は、積極的理解が3～4割、消極的理解が1～2割、理解無が約4～6割であり、2013年度は、積極的理解が3～4割、消極的理解が2割台、理解無が3～4割強であり、2023年度は、積極的理解が3割強～5割強、消極的理解が2割台、理解無が約2～4割強であった。入学以後では2003年度は、積極的理解が3～4割、消極的理解が1～2割、理解無が約4～6割であり、2013年度は、積極的理解が3～4割、消極的理解が2割台、理解無が3～4割強であり、2023年度は、積極的理解が3割強～5割強、消極的理解が2割台、理解無が約2～4割強であった。

5. 考察

ボランティア活動に関しては、入学以前の経験者の割合は大きな差異は認められなかった。入学以後の経験者の割合はコロナ禍の影響があったため若干差異が認められた。障がい者に関する読書経験は20年前・10年前より減少しており、映画やビデオの視聴経験も減少していた。これまでボランティア活動など障がい者と関わることと読書や映画・ビデオの視聴から知識を得ることで障がい者に対する態度の変化がみられると考えていたが、今回の比較より、情報入手の手段の変化が関係していると考えられた。

文献

- 1) 伊東由賀・山崎美晴・永利美花・山村礎 (2005) 精神障害に対する看護学生の態度の変化. 日本保健科学学会誌, 7 (4), 241-249.
- 2) 遠藤真・山口洋史 (1969) 精神薄弱児に対する態度の研究. 特殊教育研究, 7, 19-28.
- 3) 木船憲幸 (1986) 精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係. 特殊教育学研究, 24 (1), 11-19.
- 4) 生川善雄 (1995) 精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験, 性, 知識との関係—. 特殊教育学研究, 32 (4), 11-9.
- 5) 岡村綾子 (2014) 福祉系大学生の障害者および高齢者に対する理解について—10年前の学生との比較—. 金城大学紀要, 14, 13-28.